

短歌と教育②

伊藤一彦

梓の内と外

或る小説の一場面を引く。中学生の男子四人が夜の川を眺めながら橋の上で会話している場面である。

すると、磯村が、
「こういう歌を知ってるか。山々の迫りしあひを流れ来る川といふものは寂しくもあるか。少し違ってるかも知れないが、大体こんな歌だ」と言った。

「牧水の歌だな」
金枝が言うとうと、

「そうだ。知っていたのか」

磯村が感心した言い方で言った。

「知らんよ。しかし、牧水の歌だよ。牧水でなければそんな風には歌わないよ」
「俺、この間、姉に教わったんだ」

井上靖著『夏草冬濤』の一節である。戦前の中学生だから、今なら高校生だろう。

井上靖は北海道の旭川に生まれたが、中学は途中から沼津中学（今の沼津東高校）に学んでおり、その体験を反映した小説が『夏草冬濤』である。井上靖が沼津中に転校したのは大正十一年で、その二年前から若山牧水は沼津に住んでいた。牧水は沼津の有名な人だった。十代半ばの井上少年は実際に牧水の姿を見ている。「一度私は御成橋の上で、若山牧水とすれ違って……」云々のエッセイがある（「牧水のこと」）。

先ほどの小説の場面に返る。牧水が多少地元の有名人だったにしても、当時の中学生が牧水の歌を話題にしていることが印象に残る。しかも、そのうちの一人は牧水の歌風について一家言を言っている。一人はまた姉に教わったと話している。この姉は歌は作らないが歌集は読んでいると、続く場面に出てくる。

短歌に親しんでいるこの中学生たちは学校の模範的な生徒ではない。煙草を吸う者もいる。そして、文学好きなのである。井上靖自身がモデルの洪作少年は友人たちが

ら文学を学んでいく。後に芥川賞を受賞したときに井上靖は「文学をやったおかげで、私は詐欺師にもならず、無頼の徒にもならなかったようだ」と述べたらしいが、青春期における短歌・詩・小説などの文学の意義を改めて考える。

私の手もとに「月刊国語教育」（東京法令出版）の一九九八年一〇月号がある。その特集は「短歌・俳句教材は生き残れるか」で、三十ページ以上ある。巻頭エッセイを佐佐木幸綱氏が「小学校六年生の教室にて」と題して書いている。幸綱氏の短歌の授業の展開が面白い（定綱さんが通っていた小学校らしい）が、誌面の関係でそれは略して幸綱氏の次の言葉を引いておきたい。「近代になって〈文学〉という言葉ができ、短歌・俳句も〈文学〉となった。さらに学校教育の〈国語〉の時間で、短歌・俳句を文学作品として教えるようになった。短歌・俳句は文学という枠に閉じこめられた。近世までと比較すると、近代以後、短歌・俳句はずいぶん小さなもの、狭いものになってしまったようだ。『夏草冬濤』の少年たちは自らも「梓」から外れかかり、そして「梓」の外にあるものとして短歌に出会っていた。